

学齢期および青年期ダウン症児・者の適応行動の特徴

細川 かおり*・池田 由紀江*・橋本 創一**・菅野 敦***

ダウン症児・者の不適応行動について、学齢期と青年期に分けて調査した。学齢期ダウン症児に対しては、学校へ適応する際の問題行動を調査した。その結果、「意思交換」「自己志向性」「友達との関係」「集団参加」などの領域で問題がみられた。また、問題行動は普通学級に在籍するダウン症児に多くみられる傾向にあった。青年期ダウン症者に対しては、適応行動尺度の第2部を用い、不適応行動を調査した。その結果、「C 反抗的行動」「D 自閉性」「H 異常な習慣」「L 心理的障害」の各領域で出現が多くみられた。また、性別および、年齢差について検討した結果、3領域で性別について有意傾向が認められたが、明確な性差、年齢差は認められなかった。

キー・ワード：ダウン症 適応行動

はじめに

適応行動とは AAMD によると、「人がその年齢やその属する文化集団に照らして期待している個人的自立と社会的責任の標準に応じるうまさ」と定義されており、AAMD の精神遅滞の定義の中では鍵概念でもある。

ところで、ダウン症者の適応行動については、おもに自閉症者と比較して、問題行動が少ないことが報告されている（深川・山口・庄司・斎藤, 1982¹⁾；庄司・山口・緒方, 1982²⁾；Laveland, K. A., 1988³⁾）。青年期ダウン症者を対象とした Laveland, K. A. (1988³⁾) の研究では、加齢にともない次第に適応スキルが蓄積されていくこと、自閉症児と比較して適応行動の全領域で伸びが見られることが報告されている。

このようにダウン症児・者は問題行動が少ないといわれているが、ダウン症児・者に問題行動・不適応行動が見られないわけではない。池田ら (1988⁴⁾, 1989⁵⁾) は青年期ダウン症者に吃

音、指しゃぶり、爪かみなどの精神衛生上の問題があることを指摘している。また、適応行動としてではなく性格特徴として「動作が鈍く、のろい」こと (水田, 1978⁶⁾) が報告されている。しかし、研究が断片的であり、ダウン症者の不適応行動の特徴は明らかにされていない。そこで本研究では、ダウン症児・者の不適応行動に焦点をあて、不適応行動の特徴を明らかにすることを目的とする。不適応行動の特徴を明らかにすることは今後のダウン症児・者の指導に役立つであろう。

本研究では、適応行動を獲得しつつある学齢期と、ほぼ適応行動を獲得した青年期はそれぞれ異なった視点を持つ必要があると考え、学齢期と青年期を分けて検討した。

研究 I 学齢期ダウン症児の適応に関する研究

目的

学齢期のダウン症児が多くの時間を過ごす場所の一つに学校があり、近年特に普通学級に進級するダウン症児が増えるなど多様な学校を選択をする傾向がみられる。しかし学校へ適応す

*心身障害学系

**都立矢口養護学校

***東京学芸大学

る際、どんなことが問題となっているのかは明らかにされていない。そこで、学校での不適応行動の特徴を明らかにする。この際、普通学級、特殊学級、養護学校という場の違いについても検討する。

方法

1) 調査対象

過去に早期教育プログラム（筑波大学池田研究室）に参加し、現在小学校に通っているダウン症児74名を対象にした。有効回答率は62.2%（46名、男子29名、女子17名）であった。対象児の所属学年、居住地を Table1, 2 に示した。平均年齢は9歳4ヶ月であり、主な居住地は茨城、東京などの関東地区であった。

2) 調査手続き

ダウン症児が現在通っている養護学校小学部、小学校特殊学級、小学校普通学級の担任教師に両親を通して調査用紙を配布し回答を求めた。回答は両親の手を経ず、直接郵送を依頼した。

3) 質問紙

質問紙は65の質問項目からなる。質問紙の作成にあたっては、まずダウン症児を担当した経験を持つ教師8名（養護学校3名、特殊学級1名、普通学級4名）に、学級で適応する際に問題となる行動をできるだけ具体的にあげてもらった。これらの項目、および我々のこれまでの観察からの項目を収集し、整理・検討し作成した。質問項目は「身近自立」に関するもの5項目、「身体」に関するもの6項目、「意思交換」に関するもの4項目、「集団への参加」に関するもの6項目、「友達との関係」に関するもの6項目、「自己志向性」に関するもの12項目、「奇癖」に関するもの7項目、「反社会的・反抗的行動」に関するもの11項目、「その他」（自閉性、自傷行為、寡動、社会的ルール、がんこである等）8項目である。評定は「きわめて多い」から「ほとんどない」の5段階で求めた。

4) 分析

「きわめて多い」から「ほとんどない」の5段階に1点から5点をあたえ、計算処理を行った。

Table 1 学年（人）

1 生年	10
2 生年	6
3 生年	9
4 生年	14
5 生年	4
6 生年	3

Table 2 居住地（人）

茨城	18
東京	14
神奈川	5
千葉	2
埼玉	7

結果と考察

1) 全体の概観

全体を概観するために、項目毎に評定値の平均を求めた。便宜的に平均評定値が3.0未満の項目を比較的「問題である行動」と考え、Table 3 にその項目を示した。さらにこれらの項目を2段階（平均評定値2.5以下と3.0未満）に分類した。平均評定値が2.5以下の「問題である行動」は、「身体」に関するもの1項目（疲れやすい）、「意思交換」に関するもの2項目（発音が不明瞭で、聞き取るのが難しい／思っていることを、ことばで表現できない）、「自己志向性」に関するもの2項目（気の向かないことは続かない／とりかかりが遅い）、「その他」1項目（がんこである）であった。「意思交換」に関しては、ダウン症児は構音障害、言語領域での発達の遅れが指摘されており、これらに起因した言語の問題であると考えられる。「自己志向性」に関する項目は平均評定値3.0未満の項目を含めると5項目が入っており、自己を統制する力や集中力などの「自己志向性」に関する項目は、問題であると推察される。また、「友達との関係」や「集団参加」に関する項目も数項目あがっており、この領域での問題もあることが示唆された。

2) 学校別の比較

対象児が在籍している学校により、問題行動

Table 3 問題である行動

項目	平均(SD)	養・特	特・普	養・普
(身体) 疲れやすい	2.41(1.06)	* >		* >
(意思) 発音が不明瞭で、聞き取るのが難しい	2.15(1.23)			
	思っていることを、ことばで表現できない	2.50(1.22)		
(自己) 気の向かないことは続かない	2.18(1.01)			
	取りかかりが遅い	2.22(1.11)		
(その他) がんこである	2.07(0.80)			
(集団) クラスに対する一斉指示だけでは理解できない	2.93(1.11)	* >		* >
(友達) 友達よりも教師との関わりを強く求める	2.76(0.99)			
	交友関係が広がらない	2.95(1.40)		
	ルールのある遊びに参加できない	2.65(1.37)		* >
	好きな友達につきまとう	2.87(1.36)		
(自己) 気持ちの切り替えがうまくできない	2.89(1.36)			
	集中力、持続性に欠け、すぐあきてしまう	2.93(1.32)		* >
	自己中心的、わがままである	2.95(1.31)		
(その他) 自分の思いどおりにならないと、ふくれる	2.67(1.16)			

注1) 上段は平均が2.5以下、下段は3.0未満である。なお、項目は、紙面の都合上大意である。

注2) * p<.05 大>小

Table 4 学校別の対象者の人数(人)・生活年齢・精神年齢(ヶ月)

	人数	CA	MA	IQ
養護学校群	11(6)*	121.3(15.9)	50.2(11.8)	42.8(12.3)
特殊学級群	16(13)*	115.6(16.1)	60.8(17.3)	51.8(12.2)
普通学級群	19(14)*	106.3(20.3)	56.7(15.8)	54.0(11.1)
全体	46(33)*	121.3(19.0)	57.2(16.3)	51.0(12.5)

注1) *印の()内は田研・田中ビネーテストにより、MA、IQを求めることができた対象者数

注2) ()内はSD

の出現が異なるか、問題となった行動について養護学校群、特殊学級群、普通学級群の3群に分け一要因の分散分析を行った(Table 3)。また、Table 4に学校別のCAおよびMAを示した(MAは対象児全員ではない、測定は1991年3月におこなった)。

有意差は4項目でみられ、下位検定の結果、これらの平均の大小関係は、いずれも養護学校群>特殊学級群≧普通学級群であった。つまり養護学校に在籍するダウン症児は問題行動が少なく、特殊学級、普通学級に在籍するダウン症児に、問題行動が多くみられる傾向にあった。

これらの理由として、第1に、学校という環境の影響が考えられる。本研究は教師の評定により問題行動を捉えようとしているため、子ども自身に問題行動が多いというよりむしろ、同じ程度の行動であっても、学校という環境の違いにより教師が異なった評価をした可能性がある。第2に、現在の普通学級のカリキュラムやシステムでは、精神遅滞児に対応することが困難である場合が多く、普通学級に在籍する子どもがストレスを感じ、子ども自身の問題行動が多くなる可能性が考えられよう。いずれも推測の域を出ないが、これらについては今後検討し

ていく必要があるだろう。

研究 II 青年期ダウン症者の適応行動の特徴

目的

ほぼ適応行動を獲得した青年期・成人ダウン症者の不適応行動の特徴について検討することを目的とする。

方法

1) 対象者

ダウン症児・者を持つ親の会に所属する16歳以上のダウン症者39名(男子22名、女子17名)を対象にした。対象者の年齢、居住地を Table 5, 6 に示した。平均生活年齢は19歳(16歳—33歳)で、主な居住地は東京、神奈川であった。対象者の平均精神年齢は4歳11ヶ月(2歳—9歳8ヶ月、田研式田中ビネーテストによる)であった。

2) 調査手続き

両親に質問紙を配布して回答を求めた。さらに個別に田研式田中ビネーテストを行い、精神年齢を測定した。

3) 質問紙

適応行動尺度(日本文化科学社)を用いた。

適応行動尺度は第1部で適応行動の機能的側面を測定し、第2部でパーソナリティーのゆがみや行動異常を測定している。本研究では第2部(13領域、44項目)を分析対象とした。

3) 分析

第2部の13の各行動領域での各質問項目ごとに出現の有無を検討した。

結果と考察

1) 全体の概観

「第2部パーソナリティーのゆがみや行動異常」の13の各領域で出現がみられた人数の割合を Fig. 1 に示した。30%以上の者に出現がみられた領域は、「C 反抗的行動」「D 自閉性」「H 異常な習慣」「L 心理的障害」であった。また、44の各質問項目の中で出現が多くみられた項目を Table 7 に示した。「D 自閉性」の領域の「引っ込みがちで恥ずかしがり」という項目は45%の者にチェックされており、最も多くみられた項目であった。「C 反抗的行動」では、さしずさされると聞こえないふりをする、注意をむけないなど指示や要請、命令に従うことを拒むこと、活動に入るのが遅れたり、いったん持ち場をはなれるとなかなかもどらないなど決められたことに遅れたりさぼったりするが多くみられた。「H 異常な習慣」では、よだれ、歯ぎしり、爪かみなどがみられた。「L 心理的障害」では、思いどおりにならないと引きこもったりふくれるな

Table 5 対象者の構成(人)

16歳	7
17歳	7
18歳	6
19歳	6
20歳	5
21歳	5
22歳以上	4
計	40

Table 6 居住地(人)

東京	21
神奈川	9
千葉	3
埼玉	3
その他	4

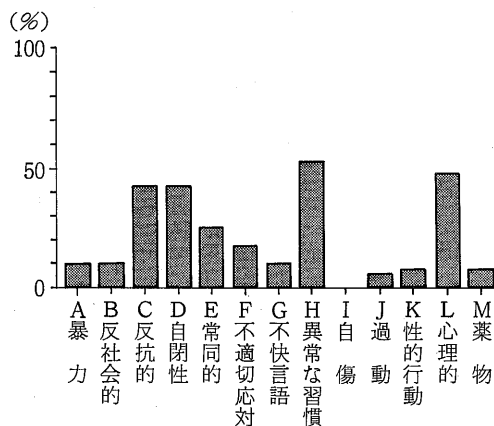


Fig. 1 領域ごとの出現人数の割合

Table 7 出現が多くみられた項目

領域	項目	出現人数 (人)
自閉性	引っ込みがちで、恥ずかしがりである	18(46.1%)
反抗的行動	指示や要請、命令に従うことを拒む	15(38.5%)
反抗的行動	きめられたことに遅れたり、さぼったりする	11(28.2%)
異常な習慣	口に関する悪い習慣がある	14(35.9%)
心理的障害	欲求不満を、うまく処理しない	12(30.8%)
心理的障害	注意をすなおにきかない	11(28.2%)
常同的行動	常同的行動がある	8(20.5%)
異常な性的行動	適当でないところで、からだを露出する	8(20.5%)

ど、欲求不満の処理がうまくできないこと、注意すると引きこもったりふくれたりしてしまい、注意を素直に聞かないなどがみられた。E常同行動ではくりかえし体の一部をゆすっているなどが多くみられた。なお、「M薬物の使用」は抗てんかん剤、精神安定剤であった。

これらから、ダウン症者は「A暴力および破壊的行動」「I自傷行動」などの目を引く行動はみられないが、爪かみ、ゆびしゃぶりなどがみられ、また、欲求不満の解消が困難であることが示唆された。青年期には就労が大きな課題であるが、注意されると引きこもってしまうなど欲求不満の解消が困難であることや注意を聞かないといった態度は、こうした職場での適応に困難をきたすと思われる。こうした行動に対する教育現場での指導や精神衛生上の配慮(池田, 1989⁹⁾)が必要であろう。「引っ込みがちで恥ずかしがりである」は、ダウン症児・者の行動特徴として、よく指摘されるものであるが、本研究でも出現率が高かった。

2) 性別および年齢差の検討

「M薬物の使用」以外の12領域について、性別について検討をした結果、「C反社会的行動」($\chi^2(1)=3.36, p<0.1$)、「D自閉性」($\chi^2(1)=2.844, p<0.1$)、「F不適切な行動」($\chi^2(1)=2.97$)で有意傾向がみられた。「D自閉性」では女子が多かったが、他の2領域では男子が多い傾向にあった。また生活年齢を18歳以下と19歳以上に分け、低年齢群と高年齢群について χ^2 検定を行ったが有意差はみられなかつ

た。精神遅滞者の問題行動について検討した庄司、山口、緒方(1982²⁾)は、女子より男子の方が問題行動の出現率が高く、男子では19歳以降減少傾向がみられたとしている。しかしダウン症者を対象にした本研究では、明確な男女差、年齢差はみられなかった。明確な男女差、年齢差がみられないことの一因として、ダウン症者は自閉症者などに比べ問題行動そのものが少ないことが考えられよう。

付記

本研究の一部は、第29回特殊教育学会(1991)において発表した。

文献

- 1) 深川優子・山口 剛・庄司裕子・斉藤純人(1982): 精神薄弱児の常同行動と関係要因の分析 [適応行動尺度 (ABS) による検討]. 特殊教育学会第20回発表論文集, 416-417.
- 2) 庄司裕子・山口 剛・緒方知子(1982): 精神薄弱児の問題行動に関する心身医学的研究 [適応行動尺度 (ABS) による検討]. 特殊教育学会第20回発表論文集, 414-415.
- 3) Laveland, K. A. and Kelly, M. L. (1988): Development of adaptive behavior in adolescents and young adults with Autism and Down Syndrome. American Journal of Mental Retardation, 93, (1), 84-92.
- 4) 池田由紀江・菅野 敦・橋本創一・細川かおり・上林宏文・江連真帆子・伊地知富美子・

- 佐藤美保・長畑正道 (1988) : ダウン症青年
期の心理・医学的問題. 安田生命社会事業
団研究助成論文集, 1-14.
- 5) 池田由紀江・細川かおり・橋本創一・菅野
敦・長畑正道・宮本文雄・上林宏文 (1989) :
地域で生活するダウン症者の身体的・精神
的問題と早期老化. 筑波大学心身障害学研
究. 14 (1), 37-44.
- 6) 水田善二郎 (1978) : ダウン症者の心理と指
導. 学苑社.

Bull. Spec. Educ. 16,111-116,1992.

Adaptive Behavior in Children and Adolescents with Down Syndrome

**Kaori HOSOKAWA, Yukie IKEDA, Souiti HASHIMOTO
and Atsushi KANNO**

The purpose of this study was to investigate the adaptive behavior in Down syndrome. Maladaptive behavior in school was investigated for children with Down Syndrome. There was maladaptive behavior in communication, self-direction, relations with friends, attending at group. A lot of maladaptive behavior was seen in regular class than special class and special school. Adaptive Behavior Scale was used to assess adolescents with Down syndrome. There were a lot of maladaptive behavior in rebellious behavior, withdrawal, unacceptable or eccentric habits, psychological disturbances. Sex group and age group did not differ in adaptive behavior.

Key Words : Down Syndrome Adaptive Behavior